

Space Cadet 論

— Heinlein の政治的言説と販売戦略の変化 —

島 克 也

【キーワード】 Heinlein・Space Cadet・Starship Troopers

はじめに

SF 作家 Robert Heinlein (1907-1988) は、その生涯を終えるまでに実に40冊以上の長編小説・短編小説集を出版したが、その中にはジュブナイル小説と分類されている、アメリカの青少年 SF 読者向けに書かれた小説群が存在する¹⁾。本稿で主に論じる *Space Cadet* はジュブナイル小説の 2 作目にあたり、1948年に出版されている。アメリカの代表的 SF 作家である Heinlein の作品には、これまで様々な批評が数多くなされてきたが、それらの批評は *Starship Troopers* (1959)、*Stranger in a Strange Land* (1961) などの代表作にばかり集中しており、*Space Cadet* に関する批評は少ない。*Space Cadet* に対する批評としては、Alexei Panshin による物語構造についての指摘²⁾、Lincoln Thomer による時代を反映した核兵器表象への注目³⁾、H. Bruce Franklin による主人公が属する惑星間パトロール隊のエスニシティへの言及⁴⁾、Panshin と David N. Samuelson による *Rocket Ship Galileo* (1947) との印象批評的な比較が存在するが⁵⁾、これらの批評は Heinlein の作品群を時間軸に沿って解説する上で *Space Cadet* に簡単に触れているにすぎない。僅かに存在する詳細な研究は、C. W. Sullivan III、Marietta A. Frank、Brian Attebery によってなされている。Sullivan は、Heinlein のジュブナイル小説群が共有する 6 つの特徴を挙げ、*Space Cadet* における教育・親・科学技術・友人・障害となる存在の意味を解釈している (“American Young Adult” 21-33)⁶⁾。Frank は *Space Cadet* に登場する女家長制を敷く金星人に注目することによって Heinlein の女性観を分析している (119-121)。Attebery は主人公が属する惑星間パトロール隊 (The Interplanetary Patrol) が、男性によって築かれた排他的なホモソーシャルな組織であることを指摘している (119-121)。

しかしこれらの批評は、*Space Cadet* と、Heinlein の作品群において最も頻繁に議論される問題作 *Starship Troopers* との関連性を述べようとはしない。両者は「主人公が軍隊的組織に所属して訓練を受け、困難に立ち向かう」という物語構造を共有しており、両者が書かれた順序を考慮すれば、*Space Cadet* が *Starship Troopers* の原型的小説であることは明らかである。また両作品は少年向けに書かれたものであったが、そこには Heinlein の政治的姿勢が前者においては間接的に、後者においては直接的に多層化されて表明されている。しかもそれらの政治的言説

は、1948年から1959年の間に変化しているのである。そこで本論では、まず *Space Cadet* に登場するパトロール隊の訓練の内容・業務の性質を詳細に分析し、この作品における Heinlein の政治的言説を考察する。その後、*Space Cadet* と *Starship Troopers* を比較することによって、Heinlein の政治的言説やその表現方法の変化が、当時の時代背景と彼の販売戦略の変化によるものであることを立証する。

1. 入 隊

Space Cadet の冒頭、日時は2075年7月1日、場所は地球の北アメリカ連邦コロラド州サンタバーバラ・フィールドに存在する基地と、作品の舞台は明確に設定されている。主人公 Matt Dodson は、太陽系の平和を守る惑星間パトロール隊の士官候補生となることを目指し、その第一次選抜試験に合格した優秀な青年であり、第二次選抜試験を受験するためにこの基地に降り立つ。その第二次選抜試験において Matt は入隊志願の動機を試験官に問われるが、“I’ve wanted to go out into space ever since I can remember... Well, people look up to an officer in the patrol.” (*Space Cadet* 15) と一般論を口にするしかできないため、その動機の曖昧性を追求される。

この場面では、以下の2つの点に注目する必要がある。第一点は、Matt の入隊が徴兵制によるものではなく、自らの意思によるものであるということである。Frank H. Tucker が “What about the power of the state to make war or to conscript soldiers? Heinlein seems to affirm the first but to reject the second.” (181) と指摘しているように、Heinlein は徴兵制に否定的であった。従って、Heinlein 自身がかつて職業軍人であったように、Matt が自由意志によって軍隊組織に入隊し、自らの国家を守ることに重要な意味が込められている。第二の点は、その主人公が自発的に入隊しているにも関わらず、彼の意思が実はそれほど強固なものではなく、軍隊組織に入隊することの意味もほとんど把握していないことが描写されていることである。このような2つの点から、小説の結末においては英雄と称されるべき存在へと変身する Matt も、小説冒頭部では英雄を目指していたわけでも、社会構造に対する深い理解を示していたわけでもないことが理解される。Heinlein は主人公をこのように設定することで、彼らが読者である少年達となんら変わらない人間であることを強調しているように見える。実際、Matt は小説のどの場面でもほとんど個性をもって描かれてはおらず⁷⁾、並外れた肉体的資質や天賦の才能を持った人物とは無縁の存在である。

Heinlein が主人公を平凡な一青年に設定したのは、この小説がジュブナイル小説として出版されることを意識し、主な読者として青少年を想定していたからに他ならない。従って、彼は読者が主人公に感情移入しやすいように、主人公を読者と同じような平凡な少年もしくは青年に限定し、個性を消去したのだと考えられる。また、平凡な青年を英雄にするものは、各人の才能・

資質・運命・出自ではなく、自らを肉体的・精神的に鍛え上げる努力であると述べ、夢と希望を与えようとしているように見える。Mattが入隊するパトロール隊はエリート集団ではあるが、その門戸はあらゆる人種・性・出身に開放されていることには注目すべきである⁸⁾。Heinleinがこの作品を教養小説として描き、年若い読者達に啓蒙を施したいと願っていたことは明らかであろう。

2. 訓練

Space Cadet に登場する訓練の場面は、Heinlein 自身の海軍兵学校での経験に基づいて写実的に描かれているため臨場感溢れるものである。Matt は惑星間パトロール隊の士官となるために厳しい訓練を耐え抜くが、この惑星間パトロール隊は抑止力としての核兵器を保持している集団であり、太陽系全体の平和とその住民全ての正当な権利を守ること、紛争を未然に防ぐことを職務としている。その訓練においては宇宙空間での移動や戦闘についての技術習得の時間は最低限しかなく、大半の時間を地球外社会についての学習に費やす。具体的には、地球外社会の生物学・歴史学・心理学・法律学・宗教学・倫理学・言語構造学など多岐に渡る。つまりこの訓練は、深い知識と広い見聞によって、可能な限り公正な判断を下す裁判官となるための知的・倫理的訓練であるといえる。

それゆえ、*Space Cadet* において Matt が立ち向かう試練は、裁判官としての知性や資質を問われる複雑で倫理的な問題を含んでいる。Matt は金星に不時着した地球の宇宙船を救出することを命じられるが、その宇宙船から救出を求めた人物は、Matt のかつての同級生である Burke という人物である。彼は、金星に眠る貴重な鉱石を不法に採掘しており、しかもその採掘作業において金星の原住民を虐殺し、さらには原住民の反撃によって Burke の仲間は命を落としているのである。つまり、この作品では、地球人も金星の原住民も一方的な加害者もしくは被害者ではない。しかも金星の原住民は地球人とは別の論理・倫理・価値観に従って生きているため、問題の解決は困難を極める。このように、*Space Cadet* では、主人公は一方の陣営に属しているながらも、その陣営を離れた立場を取り、もう一方の陣営の立場を尊重することが強要されるうえ、その曖昧で不明瞭な対立は武力を用いずに平和に解決することが求められるのである。

Space Cadet におけるこの曖昧で不明瞭な命題は、読者が主人公の英雄像をイメージする作業にも大きな影響を与える。*Space Cadet* に後続する *Starship Troopers* の主人公 Juan Rico の人物像をイメージすることは、非常に容易な作業である。なぜならハリウッド映画にその英雄像の類型が数多く存在するからである。それに対し、Matt 達パトロール隊の英雄像をイメージすることは多大な困難を伴う。それはハリウッド映画にその英雄像の類型が存在しないからである⁹⁾。Matt 達は、我々が知る裁判官とは違い、彼ら自身がほとんど理解不能の論理・倫理・価値観を持つ種族に対して平等でなければならないし、自らが属する国家や民族の慣習に拠らない判断を

下すことが求められる存在である。つまり彼らは、宇宙の平和を維持するためにアメリカ人であることのみならず地球人であることから解脱した超人的存在なのであり、それゆえハリウッド映画にその類型が存在しないのである。

Heinlein がこのような超人的存在を描き出し、青少年読者に英雄として提示したのは、この小説の出版当時のアメリカが置かれた状況が関係している。第二次世界大戦後の国際連合発足、ソ連との対立の激化などによって、アメリカは一国家としてだけではなく、民主主義国家の盟主として、世界平和を維持する警察的役割を自認していた。この時代に適合し、一つの国家という枠組にとらわれない超人的英雄こそが新たなアメリカに必要であり、そのような人物になるべく努力を積むことを Heinlein は少年読者達に訴えているのである。

さらに、そのような超国家的英雄によって担われる戦後のアメリカの敵とは、ソ連を盟主とする社会・共産主義国家のみならず、過去のアメリカでもあることを Heinlein は訴えている。この小説に登場する唯一の悪役的存在である Burke が、北アメリカ大陸に入植し、原住民を迫害し、土地と資源を強奪した白人アメリカ人達を表象する存在であることは明らかであるからである。小説の最後において、Burke が Matt 達に逮捕されて裁判を受けることからわかる通り、暗い過去を持つアメリカから離脱し、新しいアメリカに生まれ変わることを Heinlein は説いているのである。

3. 理想像の限界と販売戦略

しかし同時に、このようにして青少年読者に壮大な夢を与えようとする *Space Cadet* には、その夢の輝きを曇らせる不透明な曖昧さが数多く存在する。

第一に、絶対的な客観性を求められる Matt 達パトロール隊の判断基準を生み出すはずの規律が叙述されないのである。彼らは太陽系連邦の憲法を遵守し、それにしたがって職務を全うすることが求められると説明されているが (*Space Cadet* 47)、その太陽系連邦の憲法の内容自体については、個々の法律名が登場するだけであるため (*Space Cadet* 215)、小説中で明らかにされることはない。

第二に、核兵器を使用する判断基準が明確に説明されないのである。Matt 達パトロール隊は、自分自身の判断に従って核兵器を使用する権限をもつが、彼らを制御する上位機関は存在しない。彼らは自らが属する陣営の利益を図るために核兵器を使用しないよう倫理的に訓練されているが、そのような立場に置かれた場合、客観的な判断に従うならば、彼らの故郷アメリカに核爆弾を落とさなければならない状況も生まれ得るはずである。しかしそのような事態は、Matt の父親の “After all, it’s our Patrol. For all practical purposes the other nations don’t count. A majority of the Patrol officers are from North America. That’s true, Matt, isn’t it?” (*Space Cadet* 123) という言葉によって端的に示されるように、アメリカは核兵器の攻撃対象とはなり

えない特権を持っていることが仄めかされる。Matt はこの欺瞞を即座に否定する (*Space Cadet* 123)。しかし彼の否定は明確な理念によるものではなく、自分の名誉や立場を守るための反射的な行為にすぎない。事実、この問題を解決できない Matt は、彼の上官にこの極例について相談を持ちかけるが、上官は、核兵器は抑止力として意味をなすのだから、北アメリカに核ミサイルを発射する可能性がほとんどないことと、その攻撃命令を Matt が受けることの可能性もほとんどないことから、この2つが同時に起こり得る可能性はほとんどないとして、Matt が納得できるような説明の提供を回避するのである (*Space Cadet* 122-123)。

第三に、Burke が単なる悪役ではなく、常に現実的な見解を示して理想主義の Matt 達パトロール隊の価値観を揺さぶる役目を担っているということである。訓練生であった頃の Burke は、ロケットの着陸事故によって候補生が犠牲になった時、その事故が擬態であり、訓練生の恐怖心を煽って彼らの精神力を調査するためのテストであると、見かけとは違う現実の実態を示し (*Space Cadet* 42)、また別の場面では、パトロール隊において英雄と崇められている人物が、実は上官の命令に背いていたことが隠蔽されており、英雄が反逆者と紙一重であることを仄めかす (*Space Cadet* 25)。彼の言説が正しいのかどうかは最後まで明らかにされないが、彼は常に世界の二重性を意識しており、裁定者であるパトロール隊にも、隠蔽された暗い歴史や謀略が存在することを読者に印象付けるのである¹⁰⁾。そして彼が金星から略奪しようとした貴重な鉱石については、Matt 達は “it was a dead certainty that others would be along, in due course, to attempt to exploit the trans-uranic ores” (*Space Cadet* 189) と、Burke のような略奪者がこれからも出現することに気づいていながらも、“He tabled the matter, as something to be taken up at a later time by the appropriate experts.” (*Space Cadet* 189) と、解決策を考案することから逃避するのである。

以上のことから、Heinlein が、自身の掲げる理想的英雄像と彼らが作り出す超国家的ユートピアの実現に対して懐疑的な意見を同時に持っていたことは明らかである。しかし彼は、その理想的英雄像を真っ向から否定していない。上に挙げた3点はすべて超国家的ユートピアの実現を明確に否定する箇所というよりも、その実現において発生しうる問題点を曖昧に仄めかす箇所というべきものである。このように Heinlein の姿勢を曖昧にしながらも、彼にあくまで超国家的ユートピアという建前を述べさせたものとは、彼の1作目のジュブナイル小説である *Rocket Ship Galileo* の商業的成功ではないかと思われる。*Rocket Ship Galileo* が、SF雑誌に連載されて後にペーパーバックとなるという、SF小説としては当然の販売手順によって出版されるのではなく、SF小説の出版とは縁のなかった大手出版社である Scribner's からハードカバーによって出版され、直ちに公立図書館や公立学校の図書館に取められて成功を収めたという事実が (Sullivan, “American Young Adult” 21)、Heinlein にとって大きな強制力となったことは想像に難くないのである。

Scribner's から出版されたそれらの Heinlein のジュブナイル小説群は、彼のエージェントへの手紙の中で “Scribner's had published twelve of my books and *every single one of them made a profit for them* and each one is *still* making money for them.” (*Grumbles from the Grave* 84) と述べていることからわかる通り、常に高い評判と多くの読者を獲得していた。この人気は、青少年読者のみならず、彼らにハードカバーの本を買う金を与える両親達や図書館に収める書籍を選ぶ教育者達によっても間接的に支えられていたのであり、彼らの意見や価値観にも Heinlein が気を配る必要があったことは想像に難くない。つまり読者の親の世代に危険視される可能性がある、アメリカの未来に対する悲観的な意見を明確に提示するよりも、第二次世界大戦を終え、冷戦を迎えようとするアメリカ社会が必要とする楽観的な建前を述べておくことによって、若い読者に〈夢〉を与えることを優先したほうが販売数の上昇につながるという Heinlein の商業的打算があったことは想像に難くない。さらには、1920年代に生まれた SF というジャンルは、映画と同様に現実逃避の手段としてアメリカにおいて活発に雑誌形態で流通していたのであり、当時の SF に大衆読者が求める〈明るさ〉もまた、Heinlein は考慮に入れたのではないだろうか¹¹⁾。

しかし Heinlein は “my books for boys differ only slightly from my books for adults [. . .] and the boy's books are slightly limited by taboos and conventions imposed by the elders.” (Fuller 109) と、少年向け SF 小説と、大人向け SF 小説を完全に書き分けているわけではないことを語っている。つまり彼のジュブナイル小説群は、そのテーマにおいては大人向け SF 小説となんら変わるものではなく、躍動的かつ楽観的で希望に満ちた娯楽のストーリー展開というコーティングがなされているだけであり、*Space Cadet* にも2つの読みのレベルが意図的に設定されているのは明らかである。

第一のレベルは、この小説の登場人物に感情移入せずにはいられない青少年読者と、彼らに SF 小説の購入資金を与える親達と、彼の小説を選定する図書館員・教育者に向けられた、購買部数を伸ばすために仕掛けられたもので、このレベルにおいて、Heinlein は教養を積むことを奨励し、努力によって誰もが英雄となれることを示唆する。そして人種差別や国家間の争いが無い、平等で平和な社会を形成する一員になることを少年読者に求めている。勤勉・実直な態度を Heinlein の小説から学び、それを模倣する子供達を見て親達と教育者達は安心し、Heinlein の小説を良質の教養小説と認識して、さらに Heinlein の小説の購入資金を与えるという循環構造を構築しようと目論んでいるのである。

しかし同時に、*Space Cadet* において描かれる超人的英雄は、軍隊・警察組織において生まれ得るものとされるため、少年達は軍隊や警察に憧れるように誘導される。つまり Heinlein は、理想的アメリカは、軍隊組織において訓練された人物、すなわちかつては職業軍人であった Heinlein のような人物によって構築されるという政治的主張を、1948年の段階で自身の小説

に内包させており、この主張は1959年における *Starship Troopers* の出版においてより明確に表明されるのである。James Gifford はSFにおいて社会的・倫理的・政治的問題が論じられることは1950年代末までなされず、またSFの主題が本格的に社会的・政治的論説となるのは1960年代に入ってからであると述べており (183)、Heinlein を右翼思想や軍国主義と結び付けて論じる批評群も *Starship Troopers* のみを考察対象としているが、*Starship Troopers* に約10年先行する *Space Cadet* において、すでに彼の政治的姿勢を示す言説は登場しているのである。

第二のレベルは、Heinlein 自身を含めた、SF小説を熱心に読む大人の読者層のために仕掛けられたものである。このレベルでは、核兵器の使用についての教官の曖昧な答弁や、開拓者 Burke に指摘される隠蔽された歴史や裏事情によって、第一のレベルで示された平等で平和な理想的な世界像が実現不可能な建前に過ぎないことが暗示されている。そして、Matt が物語において地球人と金星人の調停を成立させるという偉業を成し遂げる時に彼が用いた方法、すなわち対立する2つの陣営に直面した時には、中立的姿勢を装いつつも、最終的には白人男性中心主義的価値観と判断基準に従うように強要・誘導し、結果としてアメリカ合衆国という名の帝国を拡張し続けることこそ、恒久的な平和を実現するための到達可能な最良の妥結点であると訴えているのである。このレベルの読みは、SF小説に政治的言説を導入しようとする Heinlein の実験志向と、ジュブナイル小説であろうとも、少年向けの浅薄な小説であることに終始せず、SFを愛する大人の読者や批評家達も満足させる重厚な作品にしたいという、小説家としての欲求によって促されたものであるといえる。

4. *Space Cadet* と *Starship Troopers* の連結点

Space Cadet が表層においてはジュブナイル小説としての体裁を保っていたことに反して、*Starship Troopers* は、*Space Cadet* が一般読者の目には触れないようにその深層に隔離していた Heinlein の政治的言説をあからさまに表明している。

Rico が自らの意思に従って機動歩兵隊に入隊することは、資産家である父親に対する反抗心による衝動的なものであり¹²⁾、その意思が強固なものでないことは *Space Cadet* と共通しているが、主人公が体験する訓練の様相は大きく異なっている。*Starship Troopers* の機動歩兵は、地球連邦に属さない種族からの攻撃に対して、限定的な戦闘によって地球連邦を防衛することを職務としているため、その訓練は兵器の使用法を始めとする戦闘技術と宇宙航法の徹底的な習熟と、自分達が行う戦闘方法が正義に基づく正当なものであることを確認する問答に集中している。つまりこれは特殊部隊の訓練を受けた正確無比な殺戮マシンとなるための肉体的訓練である。

それゆえこれら2つの小説は、平凡な青年が厳しい訓練を積んで困難な状況を打開し英雄となるという物語構造が共通しているにもかかわらず、これら訓練の性質の違いが Matt と Rico が遭遇する困難な問題の性質にも大きな違いを生み出す。*Starship Troopers* において Rico が立

ち向かう困難な問題とは、単純に異星人による侵略行為である。Ricoにとって異星人と戦うことは、疑いようもない正義によるものであり、異星人は悪の権化として描かれる。彼が使用する powered suits と呼ばれる強力な兵器による戦闘は一方的な虐殺であるが、そのことに対して Rico はなんの罪悪感も覚えず、高らかに勝利を謳歌する。彼が訓練の過程において自問自答を行うことはあるが、それはいかにして多くの異星人を倒せる一人前の戦士になるかという自問自答であり、敵／味方という区分を疑問視することはない。*Starship Troopers* では、対立する2つの陣営の一方に主人公が属し、もう一方を滅ぼすことによって困難な状況が解消されるのである。それゆえ、*Starship Troopers* で描かれる英雄は、ハリウッド映画でもしばしば題材にされるような人物であるため、我々はその人物像を容易にイメージすることができるのである。

これらのことに反応して、多くの批評家が、*Starship Troopers* における外国人を排斥する態度や、核兵器の使用を社会ダーウィニズムと連結させて是認する態度を糾弾し、ファシズムや軍国主義をキーワードとして論じている。Heinlein が少年 SF 読者やその親たちに対する営業努力をやめて、自らの主義主張を表明することを優先した小説をジュブナイル小説として発表しようとしたのは、作家としての自らのネーム・バリューへの信頼や、当時のジュブナイル SF 小説に対する活発な需要があったからであろう¹³⁾。さらに Heinlein は少年読者たちの興味・関心の変化や、知的レベルが向上していることを *Starship Troopers* 出版直前に確信しているのである¹⁴⁾。その判断は間違っておらず、*Starship Troopers* は賛否両論を巻き起こしつつも、*Space Cadet* より遥かに多くの読者を獲得したのである。

しかしここで見逃してはならないのは、*Space Cadet* に意図的に仕掛けられた二重の読みのレベルが、*Starship Troopers* でも反復して仕掛けられているということである。第一のレベルでは、軍隊に入隊して、外敵と戦うことによってアメリカの自由・民主主義の保全に貢献することを訴えているが、第二のレベルでは、アメリカの白人青年そのもののような振る舞いをしてきた主人公 Rico の母国語が実はタガログ語であり、彼自身が外国人であることが露呈し¹⁵⁾、明らかに中国人をモデルとしているエイリアンと戦う物語であるにもかかわらず¹⁶⁾、そのエイリアンと戦う Rico 自身も外国人であるため、敵／味方の境界がすでに消滅しており、アメリカが国民的団結の原動力となる明確な外敵を持ち得ないことを訴えているのである。

Space Cadet は、アメリカの帝国主義やエゴを敷衍させることが、世界の平和を守るための実践可能な最善策であると1940年代末のアメリカに訴える作品である。一方 *Starship Troopers* は、*Space Cadet* で主張されたアメリカの帝国主義やエゴが前提とする〈敵〉の存在が実は曖昧であること、自らの中にも〈敵〉が侵入していることは明白となり、〈敵〉を検知する手立てがないため、かつては確固として存在していると信じられていた白人男性の主体性の基盤や国民的アイデンティティが1950年代末のアメリカにおいては幻想となってしまったことを確認し、その幻想さえも失われる運命にあることを示している。このように Heinlein は、それぞれの時代におい

てアメリカ国民がなすべき理想論を掲げると同時に、その理想論の限界を述べることによって、第二次世界大戦後に世界の中心的国家としての役割を担うことを決心したアメリカの暗い行く末を予言しているのである。

Heinlein は1939年に処女短編 “Life Line” を出版して、1988年にこの世を去る直前まで常に第一線で活躍する人気作家だった。SF 人気作家であり続けたことは、彼が時代の潮流・読者の意識・社会問題に対して常に敏感であったことを示している。時にはそのことは、彼自身の主義主張の一貫性を損なうこともある。たとえば *Starship Troopers* は彼の代表作とみなされ、実際に販売部数は伸びたが当時の批評家には嫌われ (Stover 46)、一般読者の間でも賛否両論が巻き起こった。そのことを受け、次の作品である *Stranger in a Strange Land* (1961) では、その政治的主張を転換した。すると *Stranger in a Strange Land* もまた彼の代表作とみなされ、後にはヒッピーたちのバイブル的書物として扱われるのである。彼に後続する作家 Kurt Vonnegut は、芸術家を炭鉱におけるカナリアに例え、その身をもって一般読者に迫る危険を知らせる存在であるべきだと説いているが (Allen 76)、Heinlein こそが理想的なカナリアとして働き続けた作家であり、時代や状況に応じて、彼なりの〈健全な〉アメリカ合衆国像を提示し続けたのである。

注

- 1) ジュブナイル小説と分類されるものは以下の19作であり、長編小説14作、短編小説5作によって構成されている。 *Rocket Ship Galileo* (1947), *Space Cadet* (1948), “Poor Daddy” (1949), *Red Planet* (1949), “Nothing Ever Happens on the Moon” (1949), *Farmer in the Sky* (1950), “Cliff and the Calories” (1950), “The Bulletin Board” (1951), *Between Planets* (1951), *The Rolling Stones* (1952), *Starman Jones* (1953), *The Star Beast* (1954), *Tunnel in the Sky* (1955), *Time for the Stars* (1956), *Citizen of the Galaxy* (1957), *Have Space Suit — Will Travel* (1958), “Tenderfoot in Space” (1958), *Starship Troopers* (1959), *Podkayne of Mars* (1963) (Gifford 23-24)
- 2) “The course of the story take the hero [. . .] training, personal doubts, and eventual self-realization, the standard pattern for a story of this sort.” (Panshin 48)
- 3) “[Heinlein] would return to the theme of nuclear weapons in the hands of an international peace-keeping force who use them to end the threat of war” (Thomer 13)
- 4) “the Cadets include Blacks and Asians as well as colonials from Venus and Ganymede” (Franklin 77)
- 5) “The voyage itself is overly spectacular, [. . .] but the melodrama is undercut somewhat by the boys’ limited rewards” (Samuelson 122) 及び “Heinlein’s second juvenile, *Space Cadet*, is markedly better than his first, mainly because its plot is not nearly so

- over-simplified.” (Panshin 47)
- 6) Sullivian が指摘する Heinlein のジュブナイル小説群の共通項は以下の6つである。
1. growing up in the atomic age,
 2. the importance of education, formal and informal,
 3. contemporaries, good, bad, and other,
 4. adults as advisors and impediments,
 5. powerfull aliens, good and bad, and
 6. the elevation of the ideal, (“Heinlein’s Juveniles” 26)
- 7) Panshin は、*Starship Troopers* などの第一人称で書かれた Heinlein の小説について、“Heinlein’s narrator remains curiously anonymous. At the end you know nothing of his tastes, his likes and dislikes, his personal life” (96) と、その個性の希薄さについて述べているが、これは第3人称で書かれた *Space Cadet* にも該当する。
- 8) “On the charge of elitism, Heinlein is clearly guilty. He believes that there is or should be an elite of intelligent, well-educated, independent, and well-prepared people; but this elite group is open to anyone who can qualify — regardless of race, creed, color, sex, or any other arbitrary demarcation among people (or aliens).” (Sullivian “Heinlein’s Juveniles” 33)
- 9) Rico のモデルとしては、ベトナム帰還兵でありジャングル地帯でのゲリラ的戦闘のプロフェッショナルであるジョン・ランボーや、元特殊部隊 SEAL の英雄であり、合気道の達人でもある K. C. ラインバックなどの英雄達を想像すればよい。彼らは生きる殺人兵器であり、あらゆる戦力的劣勢を跳ね返し、困難な使命を単独で達成するのである。そして自らの正義を疑うことはない。また、Matt 達パトロール隊に最も近いモデルは、テレビドラマ *Star Trek* シリーズにおいて宇宙船 Enterprise 号に乗船するクルーではあるが、彼らはあくまで地球連邦の代理人であり、自らが属する陣営を離れて判断を下す必要はない。
- 10) このパトロール隊の英雄については2つの解釈が可能であろう。肯定的に捉えるならば、“the Patrol Academy actually attempts to develop an officer capable of making decisions in situations for which there may be no precedent, of thinking for himself.” (Sullivian, “Heinlein’s Juveniles” 31) と解釈でき、これを危険と捉えるならば “it is not merely a branch of the military but also a cult, complete with icons such as heroic dead whose names are chanted at the end of each roll call.” (Attebery 119) と解釈できる。
- 11) 1950年代に入ると、Heinlein は当時のアメリカにおける社会問題を比喩的に扱う SF を執筆するようになる。代表的な作品が大人の読者向けに書かれた *The Puppet Masters* (1951) である。

- 12) 反抗期の気質であると同時に、時代的な背景も存在する。「それを乗り越えることが男性としての個の確立を可能にしてくれるような『強い父親』の喪失が、青少年の非行という形で社会問題化しつつあった50年代後半において、強き父親や自らを厳しく律してくれる家庭像の探索もまた侵略SFのテーマとなった」(鬼塚 136)
- 13) “The juveniles had been such a commercial success for Scribner’s that they were already legendary within the book publishing community. Walter Minton, at G. P. Putnam’s Sons, heard that there was a Heinlein juvenile available and instructed his people to grab it unconditionally.” (Patterson & Thornton 17)
- 14) “I have followed my own theory that intelligent youngster are in fact more interested in weighty matters than their parents usually are.” (*Grumbles from the Grave* 82)
- 15) Rico のエスニシティに関しては、タガログ語を母語とすることから先住系のフィリピン人であるという説(永瀬 296)と、出身地がブエノスアイレスであることからヒスパニックである(Dolman 205)という説があるが、いずれにせよ Rico が白人の青年でないことは明らかである。
- 16) 正確にはこのエイリアンが表象する中国人とは、中国在住の中国人ではなくアメリカ国内の中国系移民を表象している。当時は中国系移民がアメリカ国内の風紀を乱す存在として忌避されていたためである。Heinlein がフィリピン系の黄色人種を主人公として選び黄色人種同士の戦いを描いた理由は、拙論「*Starship Troopers* における Heinlein の民族意識」を参照。

文 献

- Allen, William Rodney. *Conversation with Kurt Vonnegut*. Jackson: UP of Mississippi, 1988.
- Attebery, Brian. *Decoding Gender in Science Fiction*. New York: Routledge, 2002.
- Dolman, Everett. “Military, Democracy, and the State in Robert A Heinlein’s *Starship Troopers*.” Donald M. Hassler and Clyde Wilcox ed. *Political Science Fiction*. South Carolina: University of South Carolina Press, 1997.
- Frank, Marietta A.. “Women in Heinlein’s Juveniles.” *Young Adult Science Fiction*. Ed. C. W. Sullivan III. London: Greenwood Press, 1999.
- Franklin, Bruce H.. *Robert A. Heinlein America as Science Fiction*. Oxford: OUP, 1980.
- Fuller, Muriel, ed. *More Junior Authors*. New York: Wilson, 1963
- Gifford, James. *Robert A. Heinlein: A Reader’s Companion*. Sacramento: Nitrosyncretic Press, 2000.
- Heinlein, Robert. *Grumbles from the Grave*. Ed. Virginia Heinlein. New York: Ballantine Books, 1990.

- _____. *Space Cadet*. New York: Ace Books, 1948.
- _____. *Starship Troopers*. 1959. New York: Ace books, 1987.
- _____. *Strange in a Strange Land*. 1961. New York: Ace books, 1987.
- _____. *The Puppet Masters*. 1951. New York: Ballantine, 1990.
- Panshin, Alexei. *Heinlein in Dimension*. Chicago: Avent, 1968.
- Patterson Jr., William H. & Thornton, Andrew. *The Martian Named Smith*. Sacramento: Nitro-syncretic Press, 2001.
- Samuelson, David N.. “The Frontier Worlds of Robert Heinlein.” *Voices for the Future: Essays on Major Science Fiction Writers*. Ed. Thomas D. Clareson. Ohio: Bowling Green UP, 1976.
- Stover, Leon. *Robert Heinlein*. Boston: Twayne Publishers, 1987.
- Sullivan III, C. W.. “American Young Adult Science Fiction Since 1947.” *Young Adult Science Fiction*. Ed. C. W. Sullivan III. London: Greenwood Press, 1999.
- _____. “Heinlein’s Juveniles: Growing Up in Outer Space.” *Science Fiction for Young Readers*. Ed. C.W. Sullivan III. London: Greenwood, 1993.
- Thomer, J. Lincoln. *A Guide Through the Worlds of Robert A. Heinlein*. New York: Gryphon Books, 1989.
- Tucker, Frank H. “Major Political and Social Element in Heinlein’s Fiction.” *Robert A. Heinlein*. Ed. Joseph D. Olander and Martin Harry Greenberg. New York: Taplinger Publishing, 1978.
- 鬼塚大輔. 「50年代インヴェージョン・ナラティブの敵 ロバート・A・ハインラインの『人形使い』と『宇宙の戦士』」. 『文学的アメリカの闘い 多文化主義のポリティクス』 原田恭一、並川信明編著. 東京：松柏社, 2000
- 島 克也. 「*Starship Troopers*における Heinlein の民族意識」. 『英語英文學研究』第49巻. 広島：広島大学英文学会, 2004.
- 永瀬 唯 「スペキュレイティブ・アメリカ —— 思弁小説の父ハインラインとアメリカ保守の理想」. 『日本 SF 論争史』. 異孝之編. 東京：勁草書房, 2000.

Space Cadet:

Heinlein's Political Statements and Marketing Strategy

Katsuya SHIMA

Robert Heinlein's *Space Cadet* (1948) is his second juvenile novel and its story is — like that of *Starship Troopers* (1959) — based on his military life. Although *Space Cadet* has a similar narrative structure and makes similar political statements to *Starship Troopers*, many critics have not paid much attention to *Space Cadet* but have energetically discussed *Starship Troopers* and regarded it as a militaristic and imperialistic novel.

The first aim of this essay is to point out Heinlein's political statements in *Space Cadet*. Matt Dodson, the protagonist of this novel, enlists in a military structure, which is called The Interplanetary Patrol. We should notice that he is not a conscript soldier but a volunteer and that he is an ordinary WASP and has no special talents. He goes through rigorous training and finally became an elite soldier who has great authority. By resolving a conflict between the Terrans and Viniusians he became a hero. Heinlein cleverly leads his young readers to long for heroic soldiers and to aspire to becoming such soldiers. Although the Patrol consists of various races and ethnic groups, there is no racial discrimination and there are no ethnic or religious disputes. Heinlein describes this police structure as a utopia on which the United States of America should model itself.

The second aim of this essay is to show how Heinlein made the parents of his young readers think that this novel does not contain “dangerous” political statements but is an ordinary joyful juvenile novel. It is clear that Heinlein have to be very careful about the evaluations from the parents because his young readers got money for buying his novels from their parents. Heinlein's strategies in this novel are as follows: he affirms that an ordinary person becomes an American hero by making greater efforts; he claims that the equality of all people and compliance with the rules are the most important values. The readers who long for such heroic soldiers of this novel must become more diligent. As a result the parents of his young readers regarded this novel as a “good” Bildungsroman.

The third aim of this essay is to show the double vision of Heinlein in this novel. By describing an ideal police which acts in an equitable manner towards all races, ethnicities,

and cultures he shows American readers a path which they should follow. On the other hand he realizes that no kind of organizations can guarantee complete fairness. He makes a prophecy that people in America cannot escape from a paradoxical situation where they always need enemies who jeopardize political and economic stability in America in order to confirming their identities.